者、逃山中者得痘、又令遷之三根村、無幾患者相次、不暇悉遷之、男女千八百餘口、患者百二十六人、死者四十七人、中之鄉不與痘村相通、嚴防之、至今年早春一人發痘、送之里外、處草舍、敎諭鄉中勸產業、又一人得痘、鄉人謂不入山、則不能免與死于痘、寧死于餓、一時騷亂、竄入山中、不日山中發痘者多矣、仍有稍々歸家者、男女千餘口、患者四十人、死者十三人、小島令禁渡海、故無痘疾、小島民來寓三根村者二人、罹災死、靑島往年地中出火焰、燒後八丈人遷居墾田、島人預防痘災、然亦終不能免、男女百五十餘口、患者十九人、死者十三人、

〔橘庵漫筆五〕痘瘡は、本朝往古なかりしを、筑紫より流行來れりと傳紀に詳なり、これが論は玄ばらく閣、いづれも當れり、盡せる故なり、然ども其の初筑紫より流行すといへども、壹岐の國、肥後の天草地續の處は、肥前の大村領などは、昔より疱瘡を玄らず、然といへども邂逅伊勢參宮などするとき、他國に疱瘡流行する期に行合すれば、夫に感じて痘を病なり、左有ときは、同行の連これを恐れて、路傍に打捨行とき、病者旅宿を求保養するなり、類族合壁の者といへども、捨置事如斯し、殘忍なる樣なれど、誤て國に歸るときは、合壁より隣村に傳染し、甚敷ときは國中に流行す、然れば容易痘根絶がたく、大にくるしむなり、予が類族、壹州の問丸をす、依て目前見る處なり、是胎毒に依や、先天の慾火によるや、他國の水土に感せし者、國中に充るは何んぞや、其所に於て一國一鄉痘を知らざるは何ぞや、謝氏の說も又宜なり、

〔運步色葉集葉〕黑豆疹（ハシカ）

〔倭訓栞中編十九〕はしか（波）

麻疹

麻疹をいひ、麥の芒刺をいふ、ともにいら〳〵として苛酷なる義也、下學集に檜をよめるは芒刺の意也、麻疹を糠瘡ともいへり、羅浮子云、細粟如麻者呼爲麻也、國史には赤班瘡とみゆ、

〔痘科辨要七〕麻疹